



インドネシア「華人」女性の個人史：マ・ニオからの考察（後篇）

貞好, 康志

(Citation)

近代, 93:1-17

(Issue Date)

2004-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001573>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001573>



インドネシア〈華人〉女性の個人史

——マ・ニオからの考察——（後篇）

貞好康志

第三節 マ・ニオの最期と「新事実」

一九九六年七月、一年間の調査許可（のちさらに半年間延長）をインドネシア当局から得て、私は再びスマランを訪れた。以後、この町を拠点に「華人性」（人が「華人である」という帰属性）の獲得・付与のあり方や、「華人社会」と呼び得る人々のつながりの諸相についての考究を軸に実態調査を重ねた。その過程で和合会館には相変わらず日常的に出入りし、住み込み管理人であるマ・ニオとも顔を合わせることはしばしばだった。だが、彼女と折り入って話をすること、とりわけ彼女自身について私の方から改めて質問をするきっかけをなかなか掴めずにいた。

マ・ニオが語ったこと

そんなある日（一九九六年九月十一日）、スマラン華人社会にみられる中国起源の年中行事としては最も重要なものの一つ、敬好朋（キンホーピン、日本の盂蘭盆会に相当する）を見学するため、華人集住区の中心・大覚寺廟

(Klenteng Tai Kak Sia)を訪れた私は、境内で思いがけずマ・ニオと出くわした。和合会館以外の場所で彼女と会うのは思えばこれが初めてだった。彼女の方から口を開いて言うところによると、マ・ニオは和合会館に勤める前、十年以上にわたって大覚寺廟で雑用係として働いていたのだという。儒・仏・道教が混在した中国式「三教」信仰の典型的な寺廟である大覚寺廟に祀られた様々な神仏の中で、彼女は保生大帝 (Po Sang Tai T'ae) が殊のほかお気に入りだ、とその神像の前でスナップを撮られることさえ所望した。保生大帝は、中国の故事に由来する薬の神、病氣快癒の神である。前年の調査で「キリスト教に改宗し、教会にも通っている」と聞かされていた私は、マ・ニオと大覚寺廟で会ったこと自体が意外だったし、保生大帝に今も深く帰依しているらしい様子を目の当たりにして、多少戸惑う思いだった。

敬好朋の日の写真を和合会館へ届けに行った九月三十日、彼女以外に誰もおらず二人きりだったこともあって、私は久しぶりにマ・ニオの身の上について比較的ゆっくり話しこんだ。その時彼女が語った事柄を整理すると次の通りである (前篇のA-Nに続ける)。

(O) 広東出身の父はインドネシア語がほとんどできず、とりわけ感情的になった時は広東語でどなり散らした。父は漢字を書くこともできた。父からの手習いでマ・ニオ自身も幾つか漢字を読める。幼い頃、父に連れられてプタウィ (現在の首都ジャカルタ。彼女はジャカルタのことを終始プタウィと呼んだ) へ行った記憶がある。父は彼女が十一歳の時、たぶんアヘンの吸い過ぎであろう、心臓を悪くして死んだ。少女だったマ・ニオが粥を食べさせるなど末期の看病をした。

(P) 母は「生粋のソロの人」(orang Solo asli)だった。(母親については、重ねて尋ねても、マ・ニオはこれ以上のことを語らなかった)。

(Q) キョウダイは同じ父母から産まれた姉二人(前年の調査では「一人」。これは筆者の聞き違えか)と兄一人、末っ子のマ・ニオの計四人。兄妹は既に皆亡くなった。その子ら、つまり甥姪が各地にいることは、前にも話をした通りである。

(R) 兄は日本軍が来攻してきた頃から日本が敗れるまでの数年間、「タナカの旦那」(tuan Tanaka)の部下となり、「セイネンタイ」(青年隊)や「ケイボウダン」(警防団)にも加入し各地を飛び回った。主にブタウィで活動していたようだが、最期は船に乗って行ったアンボン辺りで、「インドネシア人だか日本人だかに」殺された。銃剣で突かれた無残な遺体の写真だけを後日見せられたきりである。

(S) マ・ニオ自身は自分の子を産んだことはないが、養女を一人育てた。養女はその子らと共に今はブタウィに住んでいる。

(T) 和合会の現会長、トアコ(もともと長兄を意味し、転じて結社等のリーダーの呼称にも用いられる福建語の「大哥」と敬称されるタン・シン・ルンとは中国姓が同じ陳(Chen)である。血のつながった親族ではないが、同姓のよしみで助け合っている。

(U) 大覚寺廟ではお堂と附設の慈善小学校の用務係として十三年間働いた。和合会館ではもう三十年近くになる。

さらにマ・ニオは、

(V) 「お迎えの覚悟はできている」という以前と同じ言葉を繰り返し、「私が死んだら、お墓に埋葬したりせず火葬して海に灰を撒いて貰いたいものだ」とも言った。

その後、十一月半ばに会館を訪れた折、筆者の妻が初めて妊娠したことを伝えると、マ・ニオは喜び、「赤ん坊が

生まれたら抱きにゆくから、住所を覚えておくれ」(その頃私は妻と共に、スマランの郊外に下宿を借りて住んでいた)と、いかにも楽しみだという笑顔を見せてくれた。

マ・ニオの急逝

一九九七年二月後半から私は一ヶ月半ほど日本へ一時帰国した。四月初めにインドネシアへ戻ってきた後も、スマランから離れた村の廟へ龍・獅子舞の奉納をする和合会の青少年団について泊りがけで出かけた。四月二十三日過ぎ、家があるジョグジャカルタで過ごしたり、となかなかマ・ニオと再会する機会を持てずにいた。四月二十四日昼過ぎ、マ・ニオへの日本みやげも携え久しぶりに和合会館を訪ねた私は、会館の入り口のガラス戸に貼り出されていた紙を一読して立ちつくした。

「弔告：イブ・シティ・ロハニ(タン・ギョク・ニオ)一九九七年四月二十一日逝去。

享年六十五歳。遺体は二十四日木曜朝九時、パンティ・ウィロソ病院の遺体安置室

を出発し、クドウン・ムンドゥ墓地で荼毘に付される予定」

会館一階の事務室から私の姿を認めたンバツ・トゥンが、手招きしながら歩み寄ってきた。「間に合わなかったね。みんなあなたが来るのを待っていたのに：連絡のとりのようがなかったのよ」と、残念そうというより半ば私を責めるように(と筆者には感ぜられた。当時インドネシアでは携帯電話がごく一部の人々に普及し始めていたが、私は持っていないかった。スマランの下宿にもジョグジャカルタの妻の実家にも電話はついていなかった)こぼした後、マ・ニオの最期について次のように教えてくれた。

マ・ニオの正確な死亡日時は不詳である。四月二十一日夜から二十二日朝にかけて会館で一人きりで亡くなったからである。二十二日朝九時前にンバツ・トゥンが出勤すると、いつもはマ・ニオが開けてある筈の会館の扉が閉まっ

ていた。会館の雑務手伝いに最近雇われたジャワ人男性バ・サルウォを呼び、扉をこじ開けて入ってみると、マ・ニオは階下のタイル貼りの床に椅子と机を囲む形でゴザを敷き、毛布にくるまったままうつ伏せに寝ている姿で、既に冷たくなっていた。蒸し暑い夜など、彼女は階上の自室でなくそのように階下で寝ることがあったという。警察による若干の事情聴取も行なわれたが、状況からして事件性はなさそうだといいことで検死はせず、そのままバンティ・ウィロソ病院の遺体安置室へ移された。二十三日夜に通夜 (raison) が、二十四日朝に弔告通り市南郊のクドゥン・ムンドゥ墓地斎場で火葬が行なわれた。葬儀の一切は、タン会長や葬儀業を兼ねる役員のブルノモ氏、ンバツ・トゥンら、和合会関係者によって行なわれた(そもそも和合会の本体は葬祭互助組織である)。例外は、マ・ニオが通っていたプロテスタント教会の牧師である。牧師は病院の安置室および斎場にも呼ばれてきて、キリスト教式の簡単な儀式を執り行ってくれた。棺には、遺された衣類の中から一番おしゃれな服を着せ、愛用のラジオをオンにしたまま入れてやった(ンバツ・トゥンによると、このような遺体の納め方は「華人式」である。ムスリムのジャワ人なら白い布ですっぽりくるむ)。窓もないマ・ニオの小部屋に遺されていたのは、多少の衣類とこの古ぼけたラジオ一台、それに犬のトニーのみだった。

彼女の死に私は悔恨しきりであった。単に研究者としてマ・ニオの話を彼女自身の口から聴けなくなった、ということだけではない。彼女との関係がいまや私自身の生活・人生にとっても大切な一部となっていること、そのマ・ニオともはや二度と生きて会えないという取り返しのないなさに、彼女が亡くなって初めて気づいたのである。一期一会という言葉の意味を、本当にはわかっていなかった。加うるに、マ・ニオの最期を送る時間と場を和合会の人々と共有できなかったことも悔やまれてならなかった。「あいつはどうしたんだろう」と皆が私の不在を気にしてくれていた、というンバツ・トゥンの話は半ば慰めにもなったが、同時にいっそう後悔の念をかきたてた。

三日後の四月二七日にマ・ニオの遺骨、というより遺灰 (ash) を生前の希望通り海に撒布するというので、通夜と本葬儀に参列できなかった私は、せめてもと参加を希望した。当日和合会館で待ち合わせたのは葬儀業者でもある先述のプルノモ氏である。彼によれば、最近の華人社会では築墓を伴う土葬はめっきり数が減って、火葬が増えている。火葬した場合、骨壺に入れた遺灰を寺廟の納骨堂に託す場合もあるが、遺族の経済的負担や煩わしさを避けるため、あまり富裕でない層を中心に、海に撒布する場合が少なくないという。プルノモ氏と私は、マ・ニオと同じ日に火葬された別の老女（やはり和合会員）の遺族と合流し、クドゥン・ムンドゥ墓地の斎場へ向かった。管理人室で、ビニール袋に収められていた思ったより少量の遺灰を、プルノモ氏が赤い布袋にくるみ、手頃な石を拾ってきて一緒に入れた。石は灰が散らばることなくきちんと海底に沈むように入れるとのことであった。つまり、遺灰を「撒く」(menaburkan) という言葉から連想されるイメージと異なり、実際は海に「沈める」のである。

市中へ戻り、ムスリム墓地の傍らの花市場で紅白のバラの花びらを買ひ求め、一行は港へ向かった。プルノモ氏の顔なじみらしい水上警察の小さなモーター・ボートで十分ばかり航行すれば、防波堤の外、つまり港外に出る。南シナ海までつながる波穏やかなジャワ海である。その海の濁った水中に、徐行したボート上からプルノモ氏がやおら赤い布袋をドボンと投じた。その後に、バラの花びらをこれは文字通り撒布した。プルノモ氏に促されて私も加わった。波間に漂う紅白の花びらを眺める間もなく、ボートは発進し、帰路についた。感慨深いというより何かあっけない感じの「お別れ」であった。

「新事実」

マ・ニオの逝去をきっかけとして、生前に本人から聞いていた話と必ずしも一致しない事実や事情が判明した。主なことから次の通りである。

(一) 年齢(生年)

申告で彼女は逝去の時点で六十五歳とされていた。一九九五年の出会いの頃マ・ニオ自身は七十二歳だと語っていたから、それを信じるなら、享年七十四歳位の筈である。年齢については一九九六年九月に彼女と話し込んだ折にも確認したが、自分はもう七十を超えている、と明言していた。だが、役所への死亡届など公的な書類上、マ・ニオは六十五歳として処理された。一般にインドネシアでは、オランダ植民地期から独立初期にかけて、住民登録制度がいちおう導入されていたが不徹底であり、一九七〇年代以降に住民登録証の作成・携帯が義務づけられた際、記憶や推定に基づき生年を「創出」した場合が、特に高齢者には少なくない。マ・ニオもこの例に漏れず、確とした生年をおそらく本人も知らなかったのであろう。幼時から住み込みのマ・ニオに世話をして貰ったンバツ・トゥンに言わせれば、「私の父とほぼ同年齢だったようだから、六十五歳(一九三三年生まれ)で合っていると思う」とのことである。それにしても、これがおおよその実年齢で彼女もそれを承知していたとすると、私に対する本人の語りはそれより十歳近くも高齢であり(マ・ニオは外見からは六十歳台半ばとも七十歳台前半とも判別しかねた)、その真意は今となっては不明である。

(二) 家族・親族

晩年のマ・ニオには肉親がいなかった。少なくとも最期に立ち会う家族や親族は一人もいなかった。既に亡くなった両親や姉は別にしても、彼女は生前「養女」の話を何度かしてくれた。もっともその内容は話すたびに少しづつ違っていた。一九九五年八月には「姪がスマランに住んでいる」というだけで、養女の話は出なかった。一九九六年九月の語りでは、前述(S)の通り、「養女がおり、子らと共に今はブタウィに住んでいる」とのことだった。その後一九九七年二月には、「夫がまだ生きている頃、自分たちには子供ができなかったので、子沢山で困窮している隣

人夫婦から貰い子をした。この養女がソロで結婚し、四子をもうけている。同居しないかと誘ってくれるが、犬たちが気がかりなのと、トアコ（和合会長のタン氏）が引き止めるのでスマランにとどまっている」との話を聞いた。前年に「レバラン（断食明け）にはソロの親族の所へ帰る」と聞いていた私は、てっきりこの養女一家のことだと考えた。しかし、この養女やその子らからは葬儀の折にも後にも全く音沙汰がなかった。訝しく思った私がンバツ・トゥンに質してみると、逆に怪訝な顔で「養女がソロにいと聞いたことはない。レバランに（親である）マ・ニオがソロへ帰るといいうのもおかしい話で、本来なら子供たちの方がスマランへ訪ねてくるべきだ」という。ともかく、この養女一家や、かつて聞いた「甥、姪、その子らである孫 (cucu) たち」の誰一人、彼女の逝去に際して姿を見せることはなかった。マ・ニオの葬儀の「喪主」は和合会であった。

(三) 宗教・信仰

マ・ニオがムスリム(だった)かもしれない、というのが筆者の思い違いであったことは前編に記した。彼女がかつて大覚寺廟に長く働き、そこに祀られている保生大帝に深く帰依していたらしい様子は先に述べた(彼女の命日が四月二十二日だったとすると、この年の中国暦では奇しくも保生大帝の「誕生日」に当たっていた)。一九七九年付で更新された彼女の和合会員証の宗教欄には、「孔子教」と明記されてもいた。⁽²⁾だが、最晩年のマ・ニオが同時にキリスト教とも浅からず関わっていたことが、死去に際してあらためて明らかになった。ンバツ・トゥンや和合会館に出入りする初老の女性の話によると、マ・ニオはおそらく病気を契機にプロテスタントへの入信を誘われ、折に触れて教会関係者から様々な世話をし貰っていたらしい。例えば、寝巻きや扇風機、傘などの生活用品を無料で貰っていた。これらの品の多くをマ・ニオは、自分には不要だと右から左へ売り払い、食費の足しにしていたという。とはいえ、自室である会館の小部屋壁には十字架図が(これも教会関係者から貰ったものであるが)貼られていた

から、彼女が全くキリスト教の信仰心を持っていなかった、と断ずることもできない。おそらくマ・ニオは保生大帝にもキリストにも同じようにすがったのではなからうか。ともあれ、彼女の人生を締めくくる葬儀は牧師を呼んでキリスト教式に行なわれた。また、逝去の数日後、一万ルピアの弔い金が教会から喪主である和合会へ届けられた。

マ・ニオの逝去からちょうど一ヶ月後の五月二十二日、私は妻の待つジョグジャカルタへ戻った。翌日、マ・ニオも「抱くのを楽しみに」していた長男が生まれた。だが難産であり、赤ん坊は産声を上げて僅か二十分後に息絶えた。思いもかけぬ緊急手術の末、初めての愛児を顔も見まま失った茫然自失の妻を抱え、また自分自身の心の乱れもあり、私はスマランからも調査からも数ヶ月間遠ざからざるを得なかった。ようやく調査に復帰し、和合会館でンバツ・トゥンから久しぶりにマ・ニオについての話を聞いたのは、彼女の死から半年以上経った一九九七年十一月のことであつた。その要旨は次の通りである。

①養女体験：実はマ・ニオ自身、養女に出された経験があつた。ソロで広東出身の華人とジャワ人の母との間に生まれ育つたのはその通りらしいが、その後スマランの富裕な華人某のところへ養女として貰われた。ただし、例えば遺産を継げるような法的関係を結んだわけではないらしい。この養父にオランダ式小学校にも入れさせて貰ったが、彼女には食事の仕方まで厳しく躰る養父の家庭や学校が窮屈でたまらなかつたらしく（というンバツ・トゥンの話で、マ・ニオが生前「少女の頃に正式なオランダ式の食事の仕方を習った。チーズは奇妙な味だったが次第に美味しくなつた」という類の話をしてくれたことを思い出した）、反抗し、ついには家出した。

その後、日本軍政期、兄の死や自身のスマトラ流転などを含む独立革命期（一九四五〜一九四九年）を経て、おそ

らく一九五〇年代にスマランで結婚したものとされる。

②夫のこと：大覚寺廟で働いていた時期—マ・ニオの言葉に従って逆算すれば一九五〇年代（彼女の二十歳台）から一九六〇年代（彼女の三十歳台）にかけて—に、近所に住んでいた華人男性と結婚した。しかし彼とは「交通事故で死別」したのではなく、離婚によって別れたのである。この男性をよく知っていたと言い、事実コー・リップ・チー（Koh Lip Tjie）という名まで記憶しているンバツ・トゥンによれば、彼は「まだ生きているのではないか」とさえいう。ただし、現在の所在はわからない。

③まだ夫と一緒にいた頃、マ・ニオ自身の言葉通り、子供ができなかったのでジャワ人の養女を隣家から貰った。この娘はワティニ（Watin）という名で、ンバツ・トゥンより少し若かったから、（一九九七年現在で）三十七歳くらいだろう。所在は不明である。

④養女を貰うといってもマ・ニオ自身の生活は苦しく、とりわけ夫と別れた後は、大覚寺廟での仕事だけでなく、近隣の洗濯、アイロンがけなど家事の引き受けをしていた。その「お得意先」の一つ、子沢山で人手の足りなかったンバツ・トゥンの実家にたまたま奥の小部屋が空いたので、そこへ転がり込む形で住み込みのお手伝いとなり、幼少期のンバツ・トゥンや弟妹らの面倒をみてくれた。

⑤あれこれ動いても依然生活の苦しいマ・ニオに同情した和合会の役員（後のタン会長）が、一九七〇年前後に会館の住み込み管理人の職を世話した。

第四節 考察②：個人の生とコミュニティおよびエスニシティ

以上、本人やンバツ・トゥンをはじめとする第三者の幾度にもわたる語りを通じ（それらには本人の口から出た説明でさえ時によって食い違いもみられたが）、マ・ニオの生涯の輪郭がようやく浮かび上がってきた。

筆者の眼からみて、彼女の生涯における一番の（おそらく悲劇的な）特徴は、家族関係に恵まれなかったことであろう。幼い頃に養女に出され、そこにもなじみず家出し、革命で兄を殺され、さらに夫とも別れた後半生から晩年にかけては、自分の養女との関係も実質的に切れ、天涯孤独の身の上だった。

だが、彼女は決して自分が「孤独だ」とは口にしなかった。少なくとも私に対しては（あたかも自分自身に信じ込ませるかのように）、その気になればいつでも会える親族がいるかのように振舞った。養女や甥・姪、その子（マ・ニオのいう「孫」）らは話に出てくるばかりで、ついに姿を現さなかったが、今思い起こすと、例えば一九九六年の鄭和祭の折、彼女の故郷であるソロから、ある母子が祭り見物を兼ね和合会館にマ・ニオを訪ねてきたことがある。

ソロ市内の廟に住んでいるというこの母子を、マ・ニオは「親戚（sandara）だ」と言って私に紹介した。あるいはこの女性がマ・ニオの「養女」あるいは「姪」ではないか、とその時も同席していたンバツ・トゥンに後日尋ねてみたが、「ただの知り合い」とのことであった。和合会役員の葬儀屋プルノモ氏についても、マ・ニオは「親戚だ」と私には説明していた。後日プルノモ氏本人に質してみると、「親戚関係にはないが、それくらい気を許し合える近い間柄という意味だろう」とのことだった。マ・ニオの簡素な葬儀にも十五万ルピアの費用がかかったらしいが、それもプルノモ氏が負担してすませたのだという。

マ・ニオが亡くなった時、養女や甥・姪らがついに顔を見せなかった（連絡をとる試みもどうやらなされなかった）ことは先述した。彼女の「骨を拾った」のは、もともと「赤の他人」である和合会関係者（および筆者）だけだった。マ・ニオにとって、結果的に和合会館こそ文字通りの終のすみ家となり、会館出入りの人々が実質的な家族・親族だった。

た。彼女のような身寄りなき人にとって和合会は、最後の抛り所たるコミュニティ組織の役割を果たしたと言えるだろう。

本稿のとりわけ前編、つまり調査の初期段階では、エスニシティとしての「華人性」の個人レベルでの表れ方や意味合いに注目しようと考えた。だが、マ・ニオという具体的な個人の人生の傍らに身を置くことで、私の眼に浮かび上がってきたのは、むしろ彼女が生死を託した社会関係のありようだった。この社会関係の束を表す言葉として、その中に半ば参入しつつ観察した筆者に当面最もしっくり感ぜられるのは「コミュニティ」である。ここでいうコミュニティとは、かつてウィルモットが論じたような単数形の「(スマラン) 華人社会」⁽⁴⁾では決していない。

マ・ニオにとってそれは、何より自分が住み込みの世話役でもある和合会（葬祭互助組織の役員や比較的高齢の一般会員に加え、龍・獅子舞団の青少年たちをも含む）であり、別の場合にはキリスト教会での人的なつながりであった。和合会の仕事は同じ中国姓（陳）のよしみで現会長から幹旋されたものだったから、これに限れば「華人」ならでは関係構築の仕方であったと言えるかもしれない。だが、キリスト教会は原則的に万人に開かれた組織であり、牧師・シスター・一般信徒のいずれにおいても非華人（プリブミ）と華人が混在する信仰共同体である様子が、少なくともスマランにおける筆者の観察ではしばしまられた。プリブミということでは、マ・ニオと互いの人生の中で深いかかわりをもったンパツ・タウンやその家族はジャワ人であり、そのつながりの基盤となったのは、日々顔をつきあわせる地域レベルの近隣コミュニティである。

つまり、ある場合には「華人であること」の特性を活かし、別の場面では必ずしもそれと関わりなく、たとえ家族に恵まれなくとも、他の様々な共同体（複数形の communities）の中で、彼女は生き、死んでいったと言えるのではないか。コミュニティと呼ぶにせよ共同体と訳すにせよ、予めそれありきで人々の関係が発生するというより、むしろ

ろ人々が生活の必要に応じて創り出す様々な社会関係の束がそれらしきものとして生成する（外部者の眼にも映る）のであろう。

一九九六年から九八年にかけての現地調査全体を通じ、筆者はエスニックな帰属としての「華人性」、すなわちある人（々）が「華人である」という帰属の仕方について、次の二つのことがらを確認した。一つは、プラナカンの現地社会との血統的・文化的な混交の長い歴史と、最近三十年にわたる「同化政策」（とりわけ言語・教育政策と華人のインドネシア風改名）の結果、外部者の眼にはいったい誰が「華人」なのか識別が難しくなっているインドネシア、とりわけジャワにおいても、華人とプリブミの二項対立的な区別が、マクロな政治的言説の方便としてだけでなく、より草の根の行政（例えば住民登録）や人々の日常生活における相互認識の次元でも紛れもなく行なわれていることである。もう一つは、その場合の「華人性」、つまり特定の人（々）が「華人である」とされる最終的な根拠が、中国姓の継承（いまや公的なインドネシア名の裏側の内々での「伝承」）を伴う、父系出自の原則に存することである【貞好2002a】。その法則に従えば、広東出身の父を持ち陳姓を受け継ぐマ・ニオは、たとえジャワ人の母から生まれソロで育ちジャワ語を母語としていても、社会的には「華人」に振り分けられる。

ただ、こうした人々の内面の自己規定が常に確固とした「華人」であるとは限らない。人々をエスニック／ナショナルなカテゴリーに分割してきた近代には、血統のないし文化的な「混血性」の領域はしばしば無視あるいは不可視化され、政治的・社会的に正統な居場所を与えられない。プラナカンと呼ばれるジャワの華人は、この点で典型的な人々だった【貞好2003b】。それだけに当事者たちは、「行政や自分を取り巻く社会が規定する二項対立的なカテゴリー」のはざままで、自己アイデンティティの揺れを経験する場合が少なくないと思われる。

人々の内なる自己アイデンティティのありようを覗き知るのはむろん容易でないが、晩年のマ・ニオの筆者に対す

る語りの中では、社会的に深く関係する人や自分自身が「華人かどうか」に対するこだわりはほとんど感ぜられなかった。実際、ジャワ人の子を養女に引き取ったり、同じくジャワ人のンパツ・タウンの家族と一つ屋根の下で文字通り「共生」した経歴からみてもそうである。前編に記した「人々の生身の人生は『華人であること』から出発するとは限らないのではないか」——という問題意識は、マ・ニオと過ごした時間を思い起こしながら、彼女の人生を繰り返し素描し直す中で、いっそう強まった。

おわりに

マ・ニオを一つの事例として個人の生活史に迫ろうという試みを通じ、筆者が得たものは、インドネシア華人研究に関わる知見に限っても数多い。大きな視座の据え方でいえば、エスニシティとしての「華人性」のありようと同時に、華人やそれ以外の人々も含めた日々の社会的交渉の中で姿を現す複数形の「コミュニティ」の諸相を考えることの大切さを教えられた。華人とされる人々の家族のあり方、地域社会との関わり方などについては、未開拓の様々な研究テーマの端緒となるようなヒントを幾つも与えられた。例えば、公的な社会保障制度が未整備なインドネシアで、とりわけ貧困層に属する高齢者の、最終的には葬儀にまでいたる生活の物心両面でのサポート組織として、和合会のような「伝統中国的」な互助団体と並び、あるいはそれにとって代わらんとする形で、キリスト教会が重要性を増していることが挙げられる。その背景をなす比較的表層の政治的要因として、スハルト体制期の華人に対する「同化政策」、より一般的には「無宗教」を容認しない独特の国民統合政策があったろう。もっと深層には、個人と家族の関係や社会構造・人々の価値観の変容を伴う、インドネシア全体の急速な近代化、さらには世界全体のいわゆるグロー

バル化（それは例えばミッシェン組織の人資源や資金・情報の活発な流入をも促進する）の諸動因が潜んでいることだろう。

口述された生活史の聴き取りという方法論についていえば、たとえ本人や親しい第三者の裏付けを繰り返し取っても、生年・家族関係といったごく基本的な項目についてさえ、「事実」の確定が容易でないことを、いやというほど思い知らされた。①ある歴史的対象、②それに対する語り手の当時の認識（誤認を含む）、③現在の記憶（忘却を含む）、④語り（意識的・無意識的な「語り違い」や沈黙を含む）との間にしばしばズレがあること、さらに聴き手との関係や聴く状況によって語りの揺れ動くことも少なくない、ということである。むろん、それが直ちに文献（あるいは音声・画像）資料の優越性を結論づけるものではない。口述聴き取りの訓練を積むことは、むしろ、ある時点で何者かによって記録（場合によっては創出）され固定された文字（・音声・画像）情報に対する資料批判の感性をも磨くことにつながるだろう。⁽⁵⁾

インドネシアにおける華人社会史（華人性と華人コミュニティの近現代史）を構築するという目標に照らせば、本稿での試みは筆者にとって「千里の一步」に過ぎないが、今後とも序論に述べた個人への着目を他の視角と組み合わせながら、また口述聴き取りを他の手法と相補的に活用しながら、研究を進めてゆきたいと思う。

付記 本稿は拙稿「2003a」の続編である。マ・ニオの死去から七年を経てようやく全編を活字にすることができた。彼女に捧げるにはあまりにも至らぬ本稿であるが、お世話になったマ・ニオの冥福を改めてお祈りしたい。

【注】

- (1) その成果の一端として、拙稿[2000a]、[2000b]、[2002a]、[2002b]などがある。
- (2) スハルト体制期のインドネシアでは、全ての国民が公認された宗教のいずれか一つを信仰すべきとされた。多くの華人が信奉する孔子教 (Agama Kongfucu) は実態としては、中国由来の祖霊祭祀と儒・仏・道教が混交した家庭や廟での信仰実践である。だが、これをイスラーム・カトリック・プロテスタント・ヒンドゥー教および仏教と並ぶ「宗教」として公認するかどうか、インドネシアの歴代政権はどっちつかずの態度を示してきた (華人に対する同化主義政策を基調としたスハルト体制下では、孔子教は冷遇された)。オランダ植民地期にまで遡り、インドネシアにおける孔子教の形成過程や特質を分析したものととして、Coppel[2002]の特に十四〜十九章などを参照。
- (3) インドネシア語の *saudara* の原義は「①兄弟姉妹、および同世代のイトコ、②主に同世代の親族」だが、血縁・親族関係にない他人に対しても、知人 (*kenalan*) や友人 (*teman, kawan* など) より近い間柄を示す親しみを込めた呼称として、聴衆への呼びかけの場面で、または第三者に対し説明的に用いられることがある。独立革命期には、「同志」に相当するニュアンスで、世代や社会的地位を超えた呼びかけ語としても盛んに使われた。
- (4) Willmott [1960] の標題と序文、および貞好 [2003] (前編) の七十四〜七十五頁参照。
- (5) マ・ニオの個人史研究の経験も踏まえ、オーラル・ヒストリーに対する筆者の考えを整理したものととして、二〇〇〇年十二月三日に広島大学で行われた東南アジア史学会第六十四回大会シンポジウムでの口頭発表「口述史の可能性と諸問題―インドネシア華人社会史研究のとは口から」があり、左記の学会ウェブサイトで要旨を閲覧できる。
(<http://www.soc.nii.ac.jp/jssah/conference/prog64.abstract.html#symposium-abstract>)

【引用文献】

- COPPEL, Charles A., 2002, *Studying Ethnic Chinese in Indonesia*, Singapore Society of Asian Studies.
- 貞好康吉, 2000a, 『民族性』と『在地性』—ジャワの鄭和祭にみる交錯—福井勝義編『近所つきあいの風景—つながりを再考する』, 昭和堂。
- , 2000b, 「スハルト体制末期インドネシアの『華人』カテゴリーをめぐる諸相—中部ジャワ・スマランでの調査より」『国際文化学』第二号
- , 2002a, 「ジャワで〈華人〉をどう識るか—〈同化政策〉三〇年の後で」平成十一〜十三年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)『東南アジア社会変容過程のダイナミクス—民族間関係・移動・文化再編』研究成果報告書(研究代表者・加藤剛)。
- , 2002b, 「ジャワ華人の統計的プロフィール—2000人の社会・文化的傾向」『国際文化学』第七号。
- , 2003a, 「インドネシア〈華人〉女性の個人史—マ・ニオからの考察(前編)」『近代』九十一号。
- , 2003b, 「生き延びる混血性—ジャワのプラナカン華人」『歴史評論』十二月号(通巻六四四号)
- 佐藤健二, 1995, 「ライフヒストリー研究の位相」中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂。
- 歴史学研究会編『歴史学研究』〈特集 オーラル・ヒストリー〉一九八七年六月号(通巻五六七号)。
- Willmott, D. F., 1960, *The Chinese of Semarang: A Changing Minority Community in Indonesia*, Cornell University Press.